

百年前の御嶽神社

「武州御嶽山」と社司三崎民樹

はじめに

降る雪や明治は遠くなりにけり、との句は中村草田男の昭和六年の作である。この句は草田男の代表作であるが、「当時の日本人の大多数の普遍的で共通な感懐を盛るにふさわしい（高柳重信）」句であった。昭和初期すでに「遠く」なりつつあった「明治」の末年は、本年（平成二十四年）から遡れば百年の昔になる。

本紙「武州みたけ」三十八号の発行日である平成二十四年（二〇一三）三月八日から遡り、百年前にあたる明治四十五年（一九一三）三月八日に当神社は一冊の本を発行している。本の名は「武州御嶽山」。名称も本紙「武州みたけ」と似ている。このような縁から今回明治末年に当神

社が発行した「武州御嶽山」について記したい。

「武州御嶽山」

本文冒頭に「紀行には、古く御嶽菅笠・御嶽山一石山紀行図絵など有り、近くは青梅鉄道株式会社より出しし遊覧案内、山岳会より出しし山岳なども有れど、旧きは実用に適さず、新しきは簡に過ぎて物足らぬ心地すれば、此の案内記はものせるなり。」とあるように「武州御嶽山」は案内書として書かれた。全文六十数頁からなり、鉄道路線図が含まれる地図が付され、数十点の写真が掲載されている。

紀行文は東京の飯田町駅を出発し、経路途中の武蔵野市の井之頭公園、羽村市の玉川上水取水閘、青梅市の吉野梅

林等の観光名所について記事を記しながら、御嶽山に向かう。

当時、鉄道は青梅駅が終着駅で御嶽山までは「山麓まで二里餘、山頂まで一里なり。」との道程であった。多くの参拝者は徒歩で山頂を目指したであろうが「麓までは俵（じりきしや）の往復あり。頂までは山駕（かご）の便あり。」との交通手段も別にあつたことが記されている。

百年前の御嶽神社

東京からの紀行文も御嶽山の石段を登り終えると、「海抜三千尺ある御嶽山の嶺にて、尊厳なる本宮の、高天原に千木高知りて、鎮り座す所とす。」とあるように、御本殿にたどり着く。

「社殿のつくりは、敢て荘

で学び、後にはその学校の教壇に立ちつつ、神職として神社で奉仕している。「武州御嶽山」が案内書でありながら、御祭神等まで詳しく書かれたのは、三崎の知識と文筆力によるものであろう。以下は「神道神名辞典」に収録された三崎の経歴である。

三崎民樹(みさきたみき)

文久二年（一八六二）〜昭和六年（一九三一）。三重県桑名出身。生家は松田氏。のち三崎家の養嗣子となる。明治十年神宮教院本教館に入学、十四年東京に出で、十五年皇典講究所に入學給費生となる。十六年三崎家に入る。在学中、桑名神社、中臣神社祠官を拜命、また校命により高島嘉右衛門について易学を学ぶ。十九年講究所を卒業、三重県祠官祠掌取締所桑名支所幹事となり、二十年養父の後をつぎ、社司となる。

三十七年皇典講究所奉職のため家職を退いて上京、講究所講師、國學院大學出版部主幹等を経て明治四十二年東京府社御嶽神社社司に就任、大正五年神宮神部署主事拜命、新潟支署長、長野支署長を歴任、大正十五年郷里桑名に帰り、父祖伝来の神社に奉仕した。

むすびに

「武州御嶽山」は現在では一般の方が目にする機会はほとんどないであろう。また研究者の論文等で引用されたり、他の資料で紹介されたりすることは大変少ない。発行年の明治末年の頃が、いままでは比較的「身近に」感じられて研究対象になりにくかったからであろう。この「身近さ」がこの本を歴史の中に埋もれさせていたように思われる。現在この「武州御嶽山」は発行から百年を経て、大変入

巖を極めねど、老杉・古松の周囲三丈より二丈の大樹、隙間も無く生ひ茂りて、緑は長なへに常磐の色をたたへ、梢は遙に碧空を摩する許にして、其の高さ容易に測り難く、実に、幽邃にして神寂たる宮居なり。」と、神宿る御嶽山の姿を大木の姿に象徴させて格調高く表現している。

社司 三崎民樹

この本は「中岳逸士」なるペンネームで、社司（当時の宮司）である三崎民樹が記したものである。三崎は御嶽山の出身者ではない。三重県の出身者で、明治十年代制度化されたばかりの神職養成学校

御嶽山の行事

平成二十四年	三月 八日	春季大祭（祈念祭）
	三月 中旬	奉納俳句奉告祭
	四月 下旬	産安社祭
	四月 二十九日	奉納剣道大会
	五月 七日	日の出祭（宵宮）
	五月 八日	日の出祭（神輿渡御）
	五月 十五日	男具那社祭
	六月 十七日	大口真神社祭
	六月 二十三日	神楽と雅楽の一般公開
	六月 二十四日	修行体験講座（一泊）
	七月 三十日	夏越大祓
	七月 二十二日	峰中修行（日帰り）
	九月 一日	修行体験講座（二泊）
	九月 八日	カンタンを聴く会
	九月 十五日	新神楽
	九月 十六日	新神楽
	九月 二十九日	大口真神社祭
	九月 二十九日	流鏑馬祭
	十月 八日	神楽と雅楽の一般公開
	十一月 八日	秋季大祭（新嘗祭）
	十一月 二十三日	末社祭
	十二月 九日	山岳マラソン
	十二月 二十三日	天長祭
	十二月 三十一日	大祓
平成二十五年	一月 一日	元旦祭
	一月 三日	太占祭
	二月 三日	大口真神社祭
	二月 三日	節分祭
	二月 初午	稲荷社祭
	六月 十一日	紀元祭
	六月 十一日	第四日曜日 夜かぐら
	毎月 八日	月次祭
	毎日	日供祭

（権禰宜 黒田耕）